

蕁麻疹の多様な発症機序について

西神戸医療センター皮膚科堀川達弥

蕁麻疹の発症機序は多様であり、蕁麻疹診療ガイドラインでは蕁麻疹発症に関与する因子として外来抗原、物理的刺激、発汗刺激、食物、薬剤、運動、感染、ストレス、自己抗体、基礎疾患等が挙げられている。本講演では蕁麻疹の多様な発症因子について述べる。感染性蕁麻疹では白血球増多、CRP 上昇、d-dimer 上昇を伴いやすいが、細菌感染、ウイルス感染ともに蕁麻疹の原因となる。マイコプラズマ感染による蕁麻疹も少なくない。われわれの症例ではステロイドの使用と蕁麻疹消退までの日数には関連がなかった。

即時型食物アレルギーの発症には食物抗原の性状や消化と密接に関連している。食物アレルギーのうち消化されにくいものは、大きな分子のまま消化管から吸収されて感作を起こして特異 IgE が産生されるが、このタイプはクラス 1 食物アレルギーと呼ばれる。これに対して消化されやすい食物アレルギーでは消化管で消化されてしまうため消化管での感作が起こらない。花粉抗原に眼瞼や鼻の粘膜が暴露されると感作が起こり、アレルギー性結膜炎やアレルギー性鼻炎が発症する。シラカバやハンノキ花粉症ではこれらに対して反応する特異 IgE はリンゴにも交差反応することがあり、口腔アレルギー症候群を発症する。消化されやすい食物アレルギーであっても口腔内では消化されないために口の中が痒くなるが消化管で消化されるとアレルギーが IgE と反応できなくなるので症状は起こらない。ラテックスアレルギーは皮膚や粘膜からの感作が起こるが、その後ラテックスアレルギーと相同性のある食物アレルギーとの交差反応で食物アレルギーを起こす。このように消化されやすいアレルギーが食物以外のアレルギーで感作されて交差反応で起こる食物アレルギーをクラス 2 食物アレルギーという。

食物依存性運動誘発アナフィラキシー(FDEIA)はクラス 1 アレルギーの一つであるが、運動や NSAIDs 内服によって食物アレルギー症状が誘発される。運動や NSAIDs 内服は食物抗原の吸収を促進することが明らかになっている。豆腐による FDEIA 症例では豆乳摂取と運動では症状が誘発されず、豆腐摂取と運動で症状が誘発された。原因抗原であった豆乳のコングリシニンがペプシンで容易に消化されたのに対して、豆腐のコングリシニンはペプシン耐性を示した。消化されない豆腐抗原が運動によって消化管から吸収されて症状が誘発されたと考えられる。このように食物アレルギーの発症には食物の状態、消化されやすさ、消化管からの吸収されやすさなどが関与している。

アスピリン不耐症は原因不明であるが、多くの症例で自己血清皮内試験が陽性となる。アスピリンは症例によっては皮内試験の反応を増強することから、肥満細胞の脱顆粒を

促進する作用もあるのではないかと推測される。なお、アスピリン不耐症ではかならずしも防腐剤や着色料でも誘発されるとはかぎらない。

物理性蕁麻疹には機械性蕁麻疹、寒冷蕁麻疹、日光蕁麻疹、温熱蕁麻疹、遅延性圧蕁麻疹、水蕁麻疹、振動蕁麻疹が含まれる。コリン性蕁麻疹は高温下で発汗が起こると発症することから以前は物理性蕁麻疹に分類されていた。物理性蕁麻疹では他の物理性蕁麻疹やコリン性蕁麻疹の合併がしばしば見られることから、これらは互いに関連していると思われる。何故物理的な刺激で蕁麻疹が誘発されるのかは大変不思議である。日光蕁麻疹や温熱蕁麻疹では血清を光線や温熱で刺激すると自己血清皮内反応陽性となる場合があり、血清因子が発症に関与している。コリン性蕁麻疹では自己汗や自己血清による皮内反応が陽性になるが、汗過敏型と毛法一致型がある。これらのことから多くの物理性蕁麻疹では自己成分に対する反応が発症機序に関連しているのではないかと推測される。遅延性圧蕁麻疹では真皮の深い部分にまで浮腫が及ぶため膨疹の辺縁がなだらかとなる。ステロイド以外は効きにくいことが多い。